

情報の格差と弱者に目配り

「Mr・インターネット」「Webの伝道師」として知られる“ムラジュン”氏によって三年前に書かれた「インターネット」の続編。副題に「次世代への扉」とあるように、二十一世紀に向けた問題解決指針を掲げた応用編である。論点が明確で、視点にブレがない点は、前作と同じ。教科書っぽい印象が強かった前作に比べて、今回はアクチュアルな関心を強くそそられる好読み物となっている。

まず、インターネットをめぐるビジネスや犯罪実態を具体的なケースに沿って明らかにしつつ（一〜五章）、家庭や学校の情報化に有効な次世代インターネットの可能性を問い（六章）、最後に「すべての人に」（第七章）と銘打って「情報格差」をなくすべく、理想を語る。

しかしながら、いったい「情報格差」とは何か？情報面でのハンディキャップを負う「情報弱者」とはだれか？

この難問に対して、ムラジュン氏の目配りは、なかなか行き届いている。視覚障害者・高齢者・被災者など、双方向通信する「見えないライン」

「インターネット2」（村井純著）

のどこかを寸断された人々が、主体的にブレイクスルーをはかることが、最優先課題なのだ、と。

すでに過疎の村、富山県山田村では、パソコンと回線を全希望家庭に無料配布し、ネットを基盤にした村づくりを推進している。インターネット導入をきっかけに、全国から多くの大学生ボランティア「パソコンお助け隊」が集まり、村民との交流イベント「電腦村ふれあい祭」を成功させてきている。若者と村民とが定期的にオンライン・オフライン双方で交わる魅力は、利権バラマキ型土建事業に百倍する波及効果をもつ。

まさに、これまで機械音痴・メカ音痴と呼ばれてきた無関心層こそ、インターネットを駆使することで、大きく変身する可能性を秘めているのだから。それは、若者におけるポケベルや携帯電話以上の「楽しみながらのメディア革命」を、すべての「情報弱者」たちに、もたらすはずだ。（藤本憲一・武庫川女子大助教授）

（岩波新書・640円）= 1998年8月27日⑤配信

帝の呪縛を解いた革命家

「太公望（全三巻）」（宮城谷昌光著）

太公望、本姓は姜氏、名は呂尚。殷王朝の支配力ようやくゆるみ、周が台頭してきた紀元前十一世紀、渭河のほとりで釣りをしていたところを周の西伯（のちの文王）に請われて軍師となった。そのとき七十歳余。西伯の子・武王の代になって、殷の紂王を討ち、天下をとって斉の国を領した。川柳にも「釣れますかなどと文王そばへ寄り」とある。日本では太公望、そのように知られている。が、それは伝説。

宮城谷昌光の太公望は、異民族・姜の族長の子。商王・帝乙の遺骸（いがい）に仕えさせるために、商王の子・受（のちの紂王）が行った「人狩り」をのがれ、女兒を背に左右の手で男の幼児の手をつかみ、燃える林のなかを逃げる十五歳の少年時代から、物語が始まる。

復しゅうを誓って二十三年、文字を知り軍略をわがものとして、苦難のはてに周の文王と武王、二代をたすけて、「帝は神のなかの神、宇宙の支配者」とする商王朝を倒す。人を支配しつづけてきた神の呪縛（じゅばく）を解いた最初の人、「中国史

の原点」となる「革命」をなし遂げた不屈の人である。

商の神々の頂点にいる帝を討てば、神々は力を失い、商王朝も倒れる。神力に縛られた人民は解放される。正義とは常に解放でなければならないとする太公望を支えるのは、上空に神々はおらず、世を治めるのは人であり、全世界を治める人へのみ天は命を下す、という思想。

著者は、悪女・妲己を愛して酒池肉林、中国史上の代表的暴君とされる紂王の「天帝」思想に、太公望の思想を対抗させ、断片的な史料と史料の間にあいた巨大な空間を想像力と構想力でうずめる。

うずめて太公望を「平和とはあるものではなく創るもの、多民族が寄り集まり、協力しあって理想の邦づくりに邁進する」たくましい行動者、魅力的な「男」に仕立てあげるのである。その「歴史講談」の妙は、司馬遼太郎のそれに匹敵するといっても過言ではあるまい。（井家上隆幸・文芸評論家）

（文芸春秋・各1762円）= 1998年8月27日⑥配信